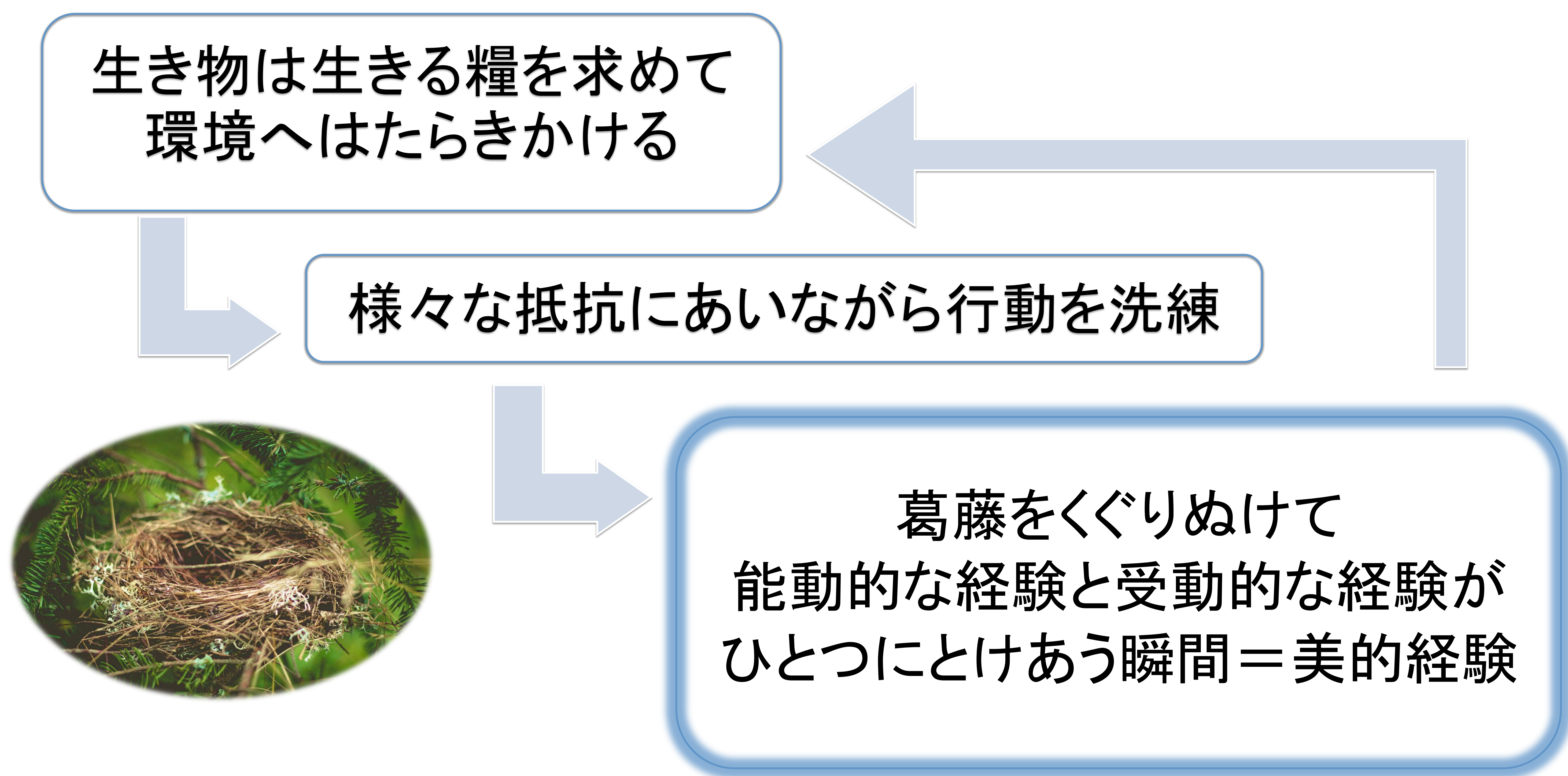


アートがあるのは美術館の中だけ？

Q：アート・芸術というと、何やら高尚な感じがして、身構えてしまうという人も少なくありません。一方で、海外の有名作品が来日すると、美術館に長蛇の列ができることもあります。はたしてアートとは、このように「非日常」のものなのでしょうか？

アメリカの哲学者ジョン・デューイ(1859-1952)が主張する美的経験のありかた



このプロセスは、作品を生み出すときだけでなく、鑑賞するときにも当てはまります。この「work of art=アートのはたらき」によって、私たちの経験は生まれ変わります。デューイはこうした経験の結びつきこそが、「生き方としての民主主義」と考えました。

「すべての芸術は表現し、それゆえにコミュニケーションする。(中略) コミュニケーションは参加を作り出す過程である。それは、バラバラに孤立していたものを共通なものにする過程である」
(ジョン・デューイ著、栗田修訳『経験としての芸術』晃洋書房、2010年、p.306)

図工・美術の授業は必要？

Q： 時間割に組み込まれているとはいえ、わずかな図工・美術。これが楽しみだという子どももいれば、苦痛だという子どももいます。何のための時間なのかという疑問に、正面から向かい合った教科書をご紹介します。

「幻の図工教科書」、『子どもの美術』の問いかけ

- 現代美術社より出版、文部省検定済教科書。
- 1980～1995年、3年の改訂ごとに出版。
- 初回採択では、公立小の占有率0.001%(110冊)。
- 教科書には珍しいハードカバー採用。
- 絶版後、2013年に西郷の呼びかけで復刊。

- 最大手の図工教科書編集を手がけた太田弘(1930-1992)が、既存の教科書に飽き足らず、出版を決意。
- 使い捨てられる教科書ではなく、子どもの手元に残る「本」を目指した。



「この本を、よむ人へ」

この本には、図画工作の時間に、かいたり作ったりするものが、のっています。じょうずに絵をかいたり、じょうずにものを作ったりすることが、めあてではありません。

へたでもいいのです。きみの目で見たとことや、きみの頭で考えたことを、きみの手で、かいたり、作ったりしなさい。

心をこめて作っていく間に、しぜんがどんなにすばらしいか、どんな人になるのが大切か、ということがわかってくるでしょう。

これがめあてです。

(1980年度用、小学3年、p.1)

執筆代表・佐藤忠良(彫刻家、1912-2011)の考え

「義務教育の美術の時間があるのは、子どもたちを全部絵描きにするためにやっているわけではないでしょうから、うんと子どもたちに必要無駄をさせればいいのです。そしてうんと失敗をさせてみることに。大学の学生を見ていると、いかに無駄なことをしてこなかったかというのがよくわかるのです」

佐藤忠良『子どもたちが危ないー彫刻家の教育論ー』
(岩波ブックレットNO.41、1985年、p.53)

試行錯誤の中でしか生まれない、発見や感動があります。
そういった子どもの経験の広がりこそ、大切にされるべきだと、
『子どもの美術』を作った人たちは考えました。